

義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。

いつか、ある戦争の体験をされた方の証を聞きました。

——— 渴き ———

・空襲で家を焼かれ、火につつまれた町中を逃げまわっていた時、一番欲しかったものは水でした。川も池も人が沈んで血だらけ、そんな中で一晩中、その方は、水、水、・・と、叫び続けていたのです。

——— 飢え ———

次に来た苦しみ、それはほっと一息ついた時、おそって来たのが空腹でした。恥も外聞もなく動物のように食べられるものは何でも、みんな拾ってガツガツ食べてしまった、と言っておられました。

——— 食べるものさえあれば ———

そして、その後しばらくは食べ物だけを探す毎日だったそうです。とにかく腹一杯食べた、食べるものさえあれば……。物質的に豊かになりたい、それが、その当時の人々の第一の目標、願いでした。

やがて、食物、住む家、着るもの……と、だんだんと生活が安定して来ました。そして、現代では一応、日本は物質的には満たされて来たと言っても良いでしょう。

——— 今は、心の豊かさを求める時代？ ———

さて、一応は豊かな国になった日本ですが、その様な時代に、次に人々が求める物は何でしょう。人々は物質的に満たされて、お腹が一杯になると、次は心の満たし、快楽、豊かさを求め始めます。音楽、絵画など美しい物にあこがれます。読書など心を満たす物に熱心になります。多くの人々は映画、旅行、趣味に浸るようになります。

いつか、NHK ニュースで次の様な報道をしていました。東南アジアの国で、もう何年間も住みついていた老夫婦がいました。ある時、日本から NHK 交響楽団が、その国に来て演奏をしました。その夫人は何十年ぶりに聞いた、その演奏に涙を流しました。感動を抑えることが出来なかったのです。人は心に、いつも感動を、美しいものをもとめているのです。

——— 心より、更に魂の満たしを ———

しかし、ここに一つの問題が出てきます。人はお腹が満たされ更に、心も満たされたとしても、それで、幸せになれるかというと、そうでもないのです。神様によって造られた、人間は、心よりもっと深い者、更に人格の中心である、魂が満たされなければ満足しません。

それで人々は、その魂を満たすものを求めます。それは霊です。

——— 3つの飢え渴き ———

今までの3つの飢え渴きを、まとめてみましょう。

- ・第1は、物質的な飢え渴きです。例えば、水、食物、着物、お金、などです。
- ・第2は、心の飢え渴きです。それは、娯楽、音楽、文学、など芸術です。
- ・第3は、魂の飢え渴きです。これを満たすのは義を求めた者たちが受ける聖霊です。

山上の説教でイエス様は、言われます。

「義に飢え渴く者は幸いです。その人は満ち足りるからです。」

でも、何で義が私たちが満たすのでしょうか？ 分かったようでわかりません。

イエス様は、別の所では、次の様にも語っています。

「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」(ヨハネ 6:35 節)

一人の人として、真に満たされ、幸福を得るには「いのちのパン」である、イエス様をいただくことが必要であると、言っているのです。

——— 幸せになるには ———

さて、皆さんは、幸せになろうとして、幸せを求めてはいませんか？ 実は違うのです。幸せになりたいと思ったら、義を、神の義を第1に求めなければなりません。

ところが多くの人々は、義ではなく幸い（幸福）を求めます。その結果、幸いを逃がしてしまいます。その様な求め方をしていると、幸せはいつも私たちが素通りしてしまいます。青い鳥は求めても、求めても捕まりません。逃げて行きます。

聖書全体が語っていることはこうです。「幸いは、決して直接に求めるべきではありません。幸福とはいつでも神の義（正義）を求めた結果、与えられるものなのです。」ですから、

皆さん、幸せを神の義の前に置いてはいけません。

幸せを神の義に優先させてはいけません。

——— 求めよう、神の正義を！ ———

聖書の一貫した主張はこうです。「義でありたい、神の正義を第一にしたい。この様に義を求める人が、神様より幸いを受け、幸いな人になれるのです。」

幸いと義との順番（位置、順序）を、決して間違えてはならないのです。

——— 釈迦の教えから・・・、釈迦の世界 ———

では、ここで少し聖書から離れて、釈迦の教えを聞きましょう。

釈迦の住んでいた町には東西南北、四つの門がありました。そこで、彼は老人、病人、死人、修行者に会います。そして、人間とは、生まれ、老い、病にかかり、そして死ぬという運

命にある事を知り、自分も修行者になって、その苦しみからの解放の道を求めようと決心します。釈迦の生涯のテーマは「苦しみからの解放」でした。しかし人は、生まれてから、多くの苦痛、苦しみを経験しながら、やがて、老い、病にかかり、死にます。これは人間の法則なので、誰一人として、この法則から逃れることは出来ません。でも多くの人は何とかして、この法則から逃れて、病にかからず、老いも苦しみのない人生を目指そうとします。

でも、いくらお金があっても、地位や名誉を得ても、結局は老いて、死んでいきます。人はなぜ苦しむのか？ それは、この法則に抵抗するからだ、と、釈迦は教えました。苦しみからの解放とは、この法則を素直に受け入れて、生きることです。病も、老いも、死など、あらゆることに欲望、執着を起こさないで、自らの分をわきまえて、静かにそれらを受け入れて死も又、受け入れていく。それが出来る人は、世の苦しみから解放されるのです。

——— 理想的な世界が、呪われた世界になった ———

さて、釈迦の教えを頭において、聖書を読むと、一つの接点が見えてきます。

それは、神に逆らい、エデンの園から追放され、人間が住むこととなった「呪われた地」が、まさに釈迦の悟った法則と、ぴったり合うのです。 (創世記 3:17～19 節、読む)

私たちは、罪によって汚染されてしまった、この世界に今、罪人として住んでいます。

ですから、私たちの人生は苦しみに満ちています。どうしたら良いのでしょうか？

釈迦は次のように言いました。「人は誰でも、罪によって呪われた人生を受け入れ、そこから逃れようとするのではなく、じたばたしないで静かに死を受け入れることによって、平安に生きるように」と教えられました。しかしです、私も含めて、素直に人生をあきらめることなど出来ません。

その証拠に、人は病気になると、少しでも体に異常があると、それをいやがり治そうとします。健康になろうとします。懸命に抵抗します。何故でしょう？

その答えは創世記 1 章 3 節です。

——— 理想的な世界があった ———

(創世記 1:3 節)「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。・・・」神様は、天地万物すべてを造られて、その世界をあまねくご覧になって、「これは素晴らしい」と感動されました。喜ばれました。神様が見たもの、罪の全くない世界、それはまさに義そのものの世界でした。神様は天と地を創造なさった時、その世界の中に、罪のない完全な存在として人間を創造され置かれました。聖書は、人間を含めてすべての世界は、汚れなど全くない素晴らしい世界であったと教えています。もちろん、人間にも罪はないのですから、病気もなく、ケガもなく、老いもなく、死もなかったのです。そこには罪で汚染されていない理想の世界がありました。

人が病気になってそれを異常と感ずるのは、神様が完全に造った、あの最初の状態が本当の世界、本当の人間なのだという潜在意識が、今生きている私のどこかにあるからではない

でしょうか。

以上が、人が病気になったり、老いたり、死を意識したりして、それを異常と感じる、理由のひとつです。 それにしても釈迦は、聖書が教える創造主を知りません。ですから、人間を超越した創造主のことは、いっさい述べていません。釈迦の救いとは、罪によって呪われた人生を受け入れ、そこから逃れようと、もがいて苦しみを受けるのではなく、静かに滅びを受け入れることにより、平安のある人生を送るようになることなのです

——— 聖書の救いのメッセージとは ———

聖書の救いのメッセージを確認しましょう。神様は人間が呪われた土地での人生を受け入れて、静かに死んでいくことを望みませんでした。そこで、神の御子イエス・キリストを、この呪われた土地に送り、人間の罪の身代わりの十字架によって、呪いから救いへの道を与えられました。ですから私たちが、より幸いな者になりたいのなら、義に飢え渴わくことは大切です。罪を解決しないまま、罪人のままで神様に幸せを求めてはなりません。幸いと義との順番を、決して間違えてはなりません。

では、義に飢え渴くとは 第1に、罪から解放されたいと言う願いです。

第2に、神様と正しい関係にいたいと言う願いです。

常に、この様な生き方を、熱望している人々を、主は祝福なさいます。たとえ、その人生、成功しても、しなくても、神様から祝福を確実にいただくことが出来ます。

——— 五歳の殉教者、もりちゃんの信仰 ———

1867年11月、明治政府が生まれました。キリシタン迫害は続いていました。津和野の36人の殉教者の中に「もりちゃん」という五歳の少女がいました。役人の一人が可哀そうに思い、おいしいお菓子を用意して「もりちゃんこのお菓子食べたいか」というと、もりちゃんはうなずきました。「それなら、キリストは嫌いだ、と言いなさい」と言いますと、もりちゃんは二度とお菓子をみようと思わず、「天国にはもっとおいしいお菓子があるよ」と、答えました。もりちゃんもやがて殉教の死を迎えました。しかし、その役人は、この時のもりちゃんの態度と言葉に感動して、後に牧師になりました。わずか五歳の子供でも、天国がはっきり分かっていたら、その一言でも神様が用いて下さるのです。

聖書の一貫した主張はこうです。「義でありたい。神の正義を第一にしたい。この様に義を求め、神様から義をいただいたものが、神様より幸いをいただけるのです。」ですから、主は言われます。「義に飢え渴く者はさいわいです。その人たちは満ち足りるからです。」

「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それ（神の義）に加えて与えられます。」（マタイ6章33節）